

私見創見 Thursday

八戸市北インター工業団地にある「帆風美術館」を「存知だろうか? 大手印刷会社「帆風」(本社・東京)が、創業者である大葎俊輔の「企

デジタル技術で精密に複製した「デジタル光筆画」を公開している。他に類を見ない美術館である。

業の最終目標は社会貢献である」という理念に基づき、地域貢献事業(メセナ)として2008年に設立した。江戸期の日本画を中心に、国宝や重要文化財級の屏風や掛け軸などを、最先端のデ

「デジタル光筆画」は、2億画素という超高精細デジタルカメラで撮影したものを、ドラムスキャナーで取り込み、色の補正や歪みの補正、質感の補正、合成処理等々の細かな手作業を経て、大型のイン

クジェットプリンターで出力したものである。一見、絵と表具は別々に見えるが、全て一枚の紙に出力されたもので、特殊な技術によって和紙と裂地の質感の違いが見事に再現されている。膨大な情報を得ることによ

帆風美術館のデジタル光筆画

「見よう見まね」で感性を磨く



佐貫 巧

八戸学院大 短期大学部准教授

さぬき・たくみ 1982年、静岡市生まれ。多摩美大卒。東京芸大大学院修了。2013年から現職。14年より八戸圏域で現代芸術教室「アートイズ」を主宰し、アートを通して少しでも生きやすい世の中をつくる活動をしている。おいらせ町在住。

日本の古い絵画の顔料は光による劣化が著しいため、いつも薄暗い照明の下、ガラス越しでの鑑賞を強いられる。本来なら、口にハンカチを当てなくては間近に見ることができなかった貴重な文化財を、画家が描いていた同じ位置に立ち、顔を近づけて鑑賞することによって、運筆の速度や墨の重なりなど、画家の等身大の息づかいまでもが感じ取れる。

5月22日~11月27日まで開催されていた企画展「池大雅展」水墨の中の色と光」に合わせて、「これも日本画見よう見まねの会」と題したワークショップを開催させていた。

【4】池大雅にならって、点描に挑戦! 輪郭線は使わず、山や木の形を墨のぼかして作り、その上に墨の点を重ねてかきあげる技法。

さらに布地の素材感、立体感まで絵の魅力を最大限に引き出しており、中にはあまりにも本物と見分けがつかないものもある。

【1】岩絵具を使って日本画の模写に挑戦! 岩絵具や膠などの画材を紹介しながら、日本画を体験。

【2】指で描こう! 指墨画に挑戦! 20歳代の後半を中心に、大雅は筆の代わりに指や爪を用いて描く「指墨画」を多く制作。

【3】池大雅にまねて山へ行く! (不習岳にて) 登山好きだった池大雅にまねて、不習岳でスケッチし普段と違う環境で絵と親しむ。

【5】一輪挿しを作って、お花を添えて、美術館に飾ってみよう! 粘土を使ってオリジナルの一輪挿しを制作。季節のお花を添えて、池大雅の作品の前に飾る。